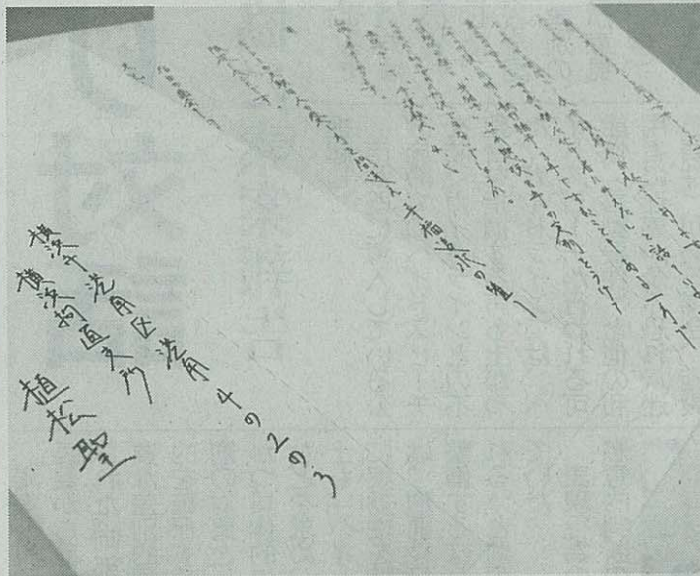


相模原市緑区の県立障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者ら45人が殺傷された事件から3年。殺人罪などで起訴された元職員の植松聖被告(29)は今なお、重度障害者への差別的な考え方を変えていない。来年1月に予定されてい

る初公判を前に自身の刑事責任能力を認め、死刑判決が出た際には受け入れざるを得ないとの認識を示した。「そうでないと社会が丸く収まらないのでは」と語った。
(石川泰太、横山隼也)

揺らがぬ独善 なお

本紙記者が面会



植松聖被告から届いた手紙

やまゆり園 事件3年

植松被告「責任能力ある」

事件後、植松被告は神奈川県新聞記者と24回にわたって面会し、37通の手紙をやりとりした。今月23、24の両日、横浜拘置支所(横浜市港南区)。この3年間を振り返った植松被告は「あつという間。非常に有意義

だった」と説明。大学教授や記者らとの面会に加え、本を読んだり手紙を書いたりして過ごしてきたといい、「意思疎通がとれない」「心失者」は安楽死するべきという考えや知識を深められた」と満足げにうなずいた。事件を起こしたことについては「自分の考えを社会に伝えるためにベストを尽くした。後悔は全くしていない」と強調。犠牲者や遺族への現在の思いを尋ねると、「刃物によって命を奪

い、突然のお別れをさせてしまったのは申し訳ない。社会のためには仕方がなかった」と淡々と答えた。

植松被告の裁判員裁判の初公判は来年1月8日。公判で争点になる可能性がある刑事責任能力の有無については「自分にはある」。死刑判決が出たらどうするかとの問いには「受け入れられない。死にたくないが、僕が死ななければ社会が丸く収まらないのでは」と自嘲気味に語った。ただ、控訴するかどうか

かは「制度があるなら、そのときに検討する」とも話した。逮捕後から続く勾留生活は「常に監視され、自由もない。個人の尊厳をないがしろにされ、屈辱的だ」と不満を漏らした。今でも同じ事件を繰り返すかと問うと、「もういい。重度障害者とは関わりたくない」と苦笑した。

面会時の植松被告は黒縁メガネを掛け、黒のTシャツ姿。逮捕後から一度も切っていない長髪を後ろで束ね、逮捕時の金髪は毛先にわずかに残るだけ。終始落着いた口調で受け答えし、記者が面会室を入室する際には深々と頭を下げた。

障害者の暮らしとは

障害者ら45人が殺傷された津久井やまゆり園事件から3年になるのに合わせ、重度知的障害者の暮らしと社会の在り方について考える集会在28日、相模原市緑区の「ソレイユさがみ」で開かれる。障害当事者や家族、支援者の有志でつくる「津久井やまゆり園事件を考える続ける会」の主催。登壇するのは、同園を昨年5月に出て地域での暮らし

28日、相模原で集会

しを模索している元入所者の平野和己さんの母・由香美さん、東京都大田区で5年ほど前から支援を受けている福井元揮さんの母・恵さん、横浜のグループホームで暮らす西村奈緒さんの母・信子さん。元宮城県知事で神奈川大教授の浅野史郎さんがコーディネーターを務め、地域で暮らすことの意義を語り合う。

当日は、西村さん家族の歩みをまとめた記録映画「やさしくなあれ」、福井さんの暮らしぶりを追った記録映画「げんちゃん」の記録の一部をそれぞれ上映。監督の伊勢真一さん、大河原明子さんが作品に込めた思いを語る。

午後2時～5時半。定員180人、資料代500円。申し込み・問い合わせはメールで杉浦さん(sugi808@infoseek.jp)

(成田 洋樹)